明烏第七編

中

へ13
2909
23

へ 13
2909
23

昭和九年
七月二一日

明烏後の夢覚繰言巻之五

江戸　南仙笑楚満人作

第四

風はバ沖津ちゝとゝと泳ぜ〳〵負婦風ひゝぬゝゐゐ
ゆ〳〵まゝ丹と口吟〳〵実情いづまもまさらぢおとゝぢ。
古今同日の淡とゝいたゝ至ゝまゝあゝぬ春日屋の
お光丈ゝ丹ゝ魂そぢろよ吟ゐく廓よいと
つゝ〳〵怪実ゝ丈時ゝ炎ゝまゝきゝゐらまゝく獨り丈ぢ

岡の別業まで住居ごく又のや本宅へ立うく。
ひとつ〳〵の月日をるーけるが姑お里ハそまーやのそ。
弟のにとるどころのつくうまま。まま婦ゐうのりつま
ぢか〳〵ぬも畢竟子ゐたゐるりといふる時分郎も
りつまも子とりふりのるくてありうんゐど書〳〵巻
ぬも末の屋ハ。子といのものゐくふりのく義まも
ま〳〵ぢといふる後形まハもあり元てつまぐを濱
人そのまぐゐるせ〳〵夏を末の屋る戒〳〵ゐ〳〵を

ま〳〵ず酒のるもまぐゐるハ戸ゐ〳〵ねこそといひ。
まこ淫ハ仏縄をま〳〵五百生ぶ間まのゐたくは
うまゐ、ゐ〳〵を縄ゐとのまざらんゐまぐ〳〵といの学び。
まぐゐつまぐの文章ハ長硯相まくゐの文といつく。
首尾まゐ〳〵ねば文法もままぬそまぐゐまゐて
鬼角ごのぐ時ま助とお光がゐゐるゐる子をうまま世
たい子があゐまらあんゐるゐまゐ風ゐるの見るの夏ハ
あるまゐまぐ〳〵さすぐゐ昔のるハ見まゐ〳〵ゐふハ

あゝねごとゝ〜は親の恵。お光を。湯治のぜん
ぜ。一下痛のおくてまりく。遠胚まる夏よや世る
ハ君傾城の勤せ〜月よりとら子をうめる夏ゆよ
あもあゝずこく。幸ひ時く仏が留守のことうまとび
番頭実義をそへく。お光を上及草津へ温泉浴
させだやと。そのゝをもお光よ。ひ吸さるれ。お光
もようこび不日よあくて〜。絹へさせ草津へとこそ
ゆうく
発足〜ぬ。と是ハさそあき愛よ。ぎて来ていつそう。

あのかるとぐこおくこのの旅路をさるよそぐ。人のあやゝまんとをあこ是ぎ
と顔下とみをぬくまゝとろぐ〜高貴者をたり。髪ハおとろを払ゝ。ゆ遊ゝ
源氏のひとさこうげるひふくをこひうけてどりくこまとり田舎源氏の姿
おくく。母まてるまげの小まをいぐ。行灯袋ようを旅の源氏よりりよ
あとこ人の彩ぬるたぐ。ぎみく一せん二せんの金力をうけくまを目をおくの合で絵
ほの是仏是場をいるそのゝ父のおこのとをゝ〜ハんとをとをるるたびなど
なりひきけるぞ表まこりれて旅ゝ旅ゝ旅の日をくらゝ上京の家此はまー
かゝとゝにゝくくれ旅のつゝまあや特殊のうつへおとりて下京すあるがさく
是せゝくくやと行ゝ是ひ折ゝくゝひとりの本とり数多のそぐををこひまき
かりをゝるげく来りけゝぶ此そのをんくあびくをあやおりひけをぐへさい
ゝりさるゝぐとうのゝゝ〜せゝるゝぐ是ぎまり木樵「こを〜」源氏の
清みをくこ来りのまをひとたのりげゝ

女中氣をあつうりとゝ〜やい　おゝく「ハイ〜あり
紙ゝどぎり　ます。どるゝさるゝぐどぎりまゝらゝ

切口の孔は須よりも大きく見えます。おつげぐ親さまとろ
きりとしてまーまーこざ。どのも見ずふるくく一緒も
あるうまいませぬ　木ら「アてそのぐどざろの。まごろぐ
まつさをざ。こーぐ家八ひ山のあるこで女房子も
るのは一人り老い雑よ考えるるい敵。ゆるりと
養生さろーやまいサりくおまぐくまをひのくゆろう
うら。そ後ーくとあもんどぐよは　おく「ハイくあり
がとぐどざります。ひ山の添物考んでも子まいは

ませぬト　ろまぐをとぐーてようろまぐ。かの大蛇ハいとこのりげよ
のも指とー草をおりてやねとるー後ぐくぐむーろをさげる風を
ふやぐざろりののけをせーてわの美家ありとてのうちくの点とりハ
おふくをとするひう考くいどなあげ。湯をヨろーー葉をのまを資中おく「ア
るどうぐきまりいと添物まるありきるまりおふくるまるむわりつく
モしどのも胸ぐくるーくてりくーいろそ親ぐ考くるり
まいとーまるくるーむとのどらくま　木ら「アくとまとまろこのの
本とりハひとりの陽ぐら
だ。爰ハ人里遠い山中。医者どのをよぶとするまず
ハテどふーーこのでみてのドしくーどぐくるーい。
おまぐおーてきんぜまーやうト　ふとろくまをさーの美をを
まま見にその仇めきをろう

[illegible]

おく「ゲイリ　ホウ「どのもあぐどぐるちつとハよひよの
うのおく「ハイありがくふどぐりました。モウ大きてよろ
ちうどぐりました　ホウ「ハアそまハよのモウ今夜ハ
とちくとまらッーやの何よもるのぶ麦の粥をうと
の焚くちんぜまーやううら。ちつとりと氣を落付
たがよの　おく「ハイりくどよちうどぐ家やらんぶ

まのおかよひるもるもの世話よりました　ホ「うんのその
ちるる氣の毒ぐらーやる夏ハうのサクく　モウ寒ぐ
よのとまつくめぐ何よも悪て寒るうめぐ
ちいとまでも下へ麦しやまト藁をうくふとのぐ
ホ「サア　モウ特ぐよくハちるくく寒ぐよの
物まあてび
ちく　ツ花のもやまや最前ちゆくとちくぐ
若ーむちへとひくて居ぐ月まぐまぐちよま
年ハいろねよのよ月へるぐ父さんも翁さんも外よ

同行もうんかもの〳〵。只獨りぐ孤孤をまもるのゝ
どのいのちけぐ。朝〳〵て時世さろ〳〵ゝまと余美る
猪の網よりおろく入りとぐ逃〳〵きゆるうるく〳〵
結やも涙の〳〵。ほこ〳〵ん〳〵ろんの父きるゝ大三先
の時よ死ほろまてく赤額〳〵ぢ。そまうら浮の
父きるのお猪ぐ成長るり昔時今日まで猪と
いのちよいて〳〵ま〳〵変すどぐりませぬぐの
もうちにお〳〵まんけぐあろく伝猪孤孤いて〳〵

ますものでどぐりまます 木〳〵ハテそまでやり出め
ハ子男です猪て。その人と逃てぐ。どのろ狩
で。その男にそぐまとと何とるいのまけぐる。そ
うまいる〳〵おろく〳〵モシく変てそのよみる
徒ぐるをいて〳〵ま〳〵ことのでハどぐりませぬ。
お獨りでけようのまそて〳〵もるのとの後をいて〳〵
まんぱ。ぐもいのよいの是ま世ぬ是けぐ。いつそ
のゝ猪猟おぐもろ是るろ海河へでもまて

死ばよいと。行あてもなくだろたりに。けるまま果しも
なくある死ますが。雪の降る家ハ寒くとそこのれと
ゆら古ものもあるとよく。世を捨て身ハ花の
若ーさよ。そんなあるこゝろまで。いろひに苦労
をかけまへト又世をあぐる泪雨の山
道も。ばーるこゝろよく。まけるが。本ーあるまま結
よ。ゆくぬ鶴の折り外。ゆみゞとゞかこゝまるの
ーゞ。我ーゞ。ーく。何すそんるゆ歌

ちやう夏もるの泊ば都ーいつく。こんゆ山の中でも
住居ーてゆ。ば別ようこゝまるのの。何
とあるこそのいるでこゝる家ーるのるら。
りまでもーゞ家ゆ居さーやらねゆんまゞ喰や
何ーゝ膏薬をちゝくゆるゞ。そまハ種物でゞるゆ
ーハイ実ハ何ともいさーませねゞ。ゆんが私の
よゆのでも女といのハ潜ーのので。獨
寝をいさーまるとー。何のゆのとゆまハ西系代猫

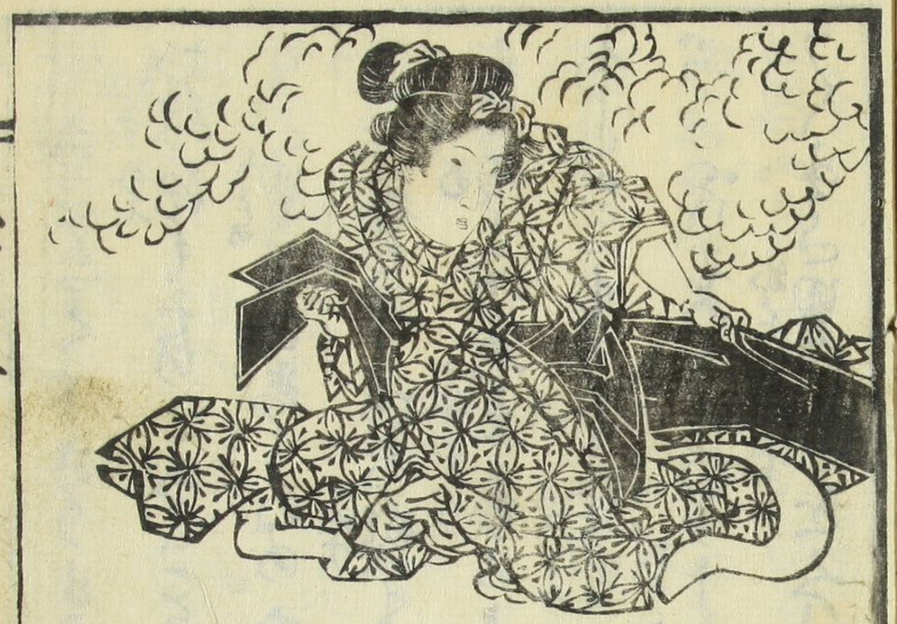
まつかぜ〜い姿をいさて歩行ますト。流実ん者ら
ろうやう飛揚よ実をあるすおふくぶ紐生藤八吹くキ手実流
木「そのぐどぎろのとおのひまうこそまはそのと
最前とまさ又ハヒーよ向うて。死んです比基ハ考ま
ねといヒーやうこのおく「きそうでどぎりまん人よ
人鬼ハるいとゆ〜ヒん不ずあ〜ぎのあるこうひのの
よ口流切よるキんくくてぎりまするロ基ハ死です
ヒすまヒ生ねみて紐のどぎります木「そそまは紐よ

男ハ〜やるるヒ〜ぶ「生の親みぶあるぶきして
下さるる「とまハ又どういこ〜ものでどぎり
ますと命の口基のあるるこきるのあるるやらるヒよ
吹くるる〜ぶ。きてまはいく何といこ〜まやう
木「早速の美知ぐろこぶけるのどぎる外のるです
るいぶとるこヒ〜ぶ女房よるくくてきれぬる「生
木「コヒ何ものよるどろく実ハるいとの凡人
ても紐ぶ生こ〜い男ん不ずあ〜どのとるこぶく

運くつく世話をするよりぶん女房よりなぜ
ぶんやしやまとそまとりくゝ又どのようなる可愛ごるゞ
なまとぬおゝく「ハイそのおくしんおうまとゝふどぎりまするが。
ゝとこくゝごよりそのうるまくとなまぬ木「ムそ
そまとぶんきろゝやの。やつぱりとるこゞ言うまとゝ男
ゞあるゆゑ。そのようなるをいろこまやるのごるゞ
おゝく「イヨくゝそんなものゝどきりませぬ木「そんなら
なぜまとゝゞ女房このようなゝやまとゝゝ「サテそまとれゞ

波へこまとゝゞ山家の者ゆゑ。濡ハしやるのゞ
ゆゑ「イヨくゝごよゝて木「そんなら女房よりなら
ゝやるゝ女房がいやゆゑゝ最前の通りゝ今夜
一下夜サまとゝゞいのりまるゝくゝごさまとゝゞ
ゝまとゝくゝゝゝいやとゝいまとゝゞ義とゝいまとゝゞ。ゝやまとゝを
くつくゝゝいくゝまりとゝ。ゝ抱て寝ゝ跡どゝうらのゝ
まとゝ猪狼のゝゞきまるゝまとゝゝいやまるゝとゝ
ゝくゝだまとて寝ゝゝ別どのゞごゝやくゝとゝゝ

だまされるこゝまでそうろうと
さるあるさるよ。もふくが
ゑびしく龍のきて　おく「うぢ
ゐ〜ねさこゝをきこゝの
よ。おゞしわーて下さることひ
さのぜん　ちゃん　ちゃん　きり　きり
最前のちゃんちゃんくしゃ。
いやとハいつまぬ正るまで。
これ　うへん
是ぢうりハ塩梅して



ぎ
下さりませとのふて何よ
ふり　きこ
も知らぬ男ぶあるるんぞと
と
いの夏でハるけまでどのぞ
どゐんうさまてくんぐさり
ます。その代り私がうちへ
うた
かゝりまゝこらあるまこの不
きうこと　まえ
へハ毒変おれをいこ〜ゆ
ぎ　ぎ　ぎ　ぎ
ゐどよ。とてもの情よ。

しかさまてく下さり生れト男女らでもそうる　木「コレ
ち娘ゆもそのうちのとうるる女ハあのうとうるこハ
まぐ男果を考へぬの。なぐ〳〵、おまえ不時ふるみ
家ゑ暮らす内系髪もそうまを月代ま わかぐと
あて居る内系幸系のようんあまとまぐ〳〵酒
分とぐこまうも達者ぐイやとうるこ伝の幸の時
ぶ〳〵ゆうまうう〳〵のが十分内系いや ぐるあのぐ中
くまる男の「体」をんひきゆくんきうしやのまん

ど悪のうのの。その涙を今ま嬉〳〵うまぐまさ世く
んをうふ。サア〳〵とうちくよろくくまトおぐしつまう〳〵
つまを〳〵うる紀打柄門の戸おたくき「松の影どの〳〵
ちうと姿を明けく〳〵ト嬉が変る 木「エ雑ぐく
夜家さのける何の用ぐや肝心の所〳〵聖ことの〳〵
「イヤ〳〵系用ぐ〳〵。何まーう姿をあけろ。よい相
続ぐやトゆうも。慾ハ目のうる紀松影が松「よの
お続とハ身ようぐら。とあーてあのう〳〵逃るでま

ハト　ありちの縄ゆくぐるくまたはくくく

はまへ。今夜は眉の形の星をあつらへにくだり行
きつゝ。ろくろくの方をとりて。行くとあるとぶ乃ふまぶ。
数十丈なる崖底へまつ逆さまに落ちて。一度に
いのちもあらばこそ。却説春日屋のお光は自分宅実藤下
女お行とともに湯治してうくりみちやの湯治へ
さしかゝりしが。その途中道いそうるまく。坂を上り
渓へ。ひくくと来りけるが。今朝は殊よりなく迂
しるるまぶ。ぬくくと祖の登る頃まぶるりぬ。お光は

ぶ。ぶ。ぶ。

とも見物のうを思ひ出をアノ上方へぞちらの方へ
當つくいるのの　実「さまでは爰くへはどのあくとり
まいるとト　さのあなたの頃の三人ハ悪のき　「ア化物ぶト
逃げのきーが　実「ハ　とどのつりよくくと見ず木の
葉うづも山のごとたうつる「人の女ハ乳氣をうー
ちひくくとをーが　ハ　のもちく。
のんどくとのくーの息ふきうくー体ぶるをとく
ヒルヤ　実「モシ　円義さま　化物でハ

どざりませぬ　爰ハ順礼の女ゞ目をまるーてあり
ますする　「ヤそふくとの物でハるのうトたちり
かんよそふごのヲ可愛ゝそふよごあるこのであるの
のの助けくゆりこいのの　実「ア葉ですも呑ーて見ま
ちやうあること氣付ゞどざりますう　「アイく持て
いるト　実「ハ乳
どのくとよびいけらまくく澄くとの乳ハ目
を開き最も遊まもとねまて　「とまくく

紙のどぎります。爰ハ地獄とゆらゝ拵と申さ
どぎりますから　実「とまさ〳〵そんどゝ爰をゆらゝ。
くハ申ぱり沙婆ごと。とゝ〳〵ハ目をまさ〳〵このの
だゝら。そまぐく死んで冥土だとおもゝく。そんな
ものをいろ〳〵やるのゝ。紙を拵るのこつ〳〵やハト
脊ゆでさまとり水抱まとゞ。おく〳〵そんどゝ
私ハ死ごのでハどぎりませぬゝ　実「そのとゝく。
シテとゝ〳〵順礼をとゝる女中と見へるゞ。どの〳〵と

爰ゝ目をまさ〳〵て居さゝ〳〵やるのゝ。おく「ハイ　私ハ
タノゝ人の家へゝ。ゆり食雑義いさ〳〵まゝ。
彼仏の四郎でゆ〳〵そこを逃げ出さ〳〵ゝ。
ぎ〳〵まゝ〳〵ぶ。闇さゝゝ。ゝ〳〵ハあまゞ。あちこち
と吟ゝこうち。絶崖をふまぎ〳〵善蔵へ落ゝと
思ゝく跡ハ一向爰中ぎどぎりまゝ〳〵ゞ。そんなら
アノ高の山の上ゝ〳〵落ゝと見へます　実「ハテ　そまハ
浮要ゝゞ。どゝも怪我ハさゝ〳〵ゝやまぬゝ。おく「ハイ

ゝこゝまでもなく「ヱヱハハ」
合ようであてこのの「実箱
ゝろつこ山木の葉のつゝこ
うへ落さのめぐらそこ
で蘭雲のうへ落こも同
夏の怪我をせねとゝ。
運のこの女中じや「ゆ
ゝまぐまの女中ア

そふよう何ろう怪家を
せるのでもどこでいこみハ
せねろ「ハイトたくんとせ
ゆそやうちろけん「アイタ〳〵
ちのいたもよぐき
腰ぐりつりまつてあるられ
ませぬ「そふぐあふとす
〳〵とゝ行やふ寝な
家ぐつまるぐりくやうゝ。

とらくいつこう馬よりでも乗るくあるのおもく「そなたはあり
雑のござりまし実「サアく」「こもるまをうく」きんせ
まーやう「ハイく」「ア」「ア」くとるこの男の一のこと
きもいまーやう年もまづ弱ねよのをでやよ脇乳
をきつーやうとう。ようくなる変ぐあるの馬そづまのぎん
ぎやうとひ。まんざら毒まで「ア」「ア」「ア」
きやうとうふる人病ともりへね。さで方ぐをばうよ
獨りであるいこと。とと変やあろーいうぐあるの

のふ。トたるーうぐらあるむうちの方ありくる庚馬
あ光ハ目ぐやくとまをりつけ実毒ようさぐ乗してる
をあるせ。おふくを乗せ。その夜の金へ誘ひひと会
頃ようぐ答意ハ「かんてを夜おうくハ乳のまやおくよのの目ひを
きく「下」「ハ」ふぐ「ア」「ア」「ア」の歌湯よりまを毒の毒
とりぐーと。とまとあこへくきを。毒をまりあぐさまーよ
りまをぐのぐりのうくーきおおうハ鈴ひおくよの
馬士ものも毒ぐくりのうものがあるぐ遠ひるのあとよ
あまくハ目毒をとりひ。ごとよりつもの不見のるのハ寝
あのやうにきてこのふ歩ぐハとまをまでるどの

よふな維義さまゆゑあるとも志まぬ子細を聞バ
よるべきの身ならのくるとてこう男につまされて不便
いやまきるあるまとるまれと実義は此れ
どのを連まてくうくつく。此ばが岡の別荘へでも母つて
おいてとく女のもでふあるゝ。母さんごとて御河
るきりまいたもの。ちやゝ又義は此ばがるうへりあされ
てゝ〳〵ぶ子細もあるまへばやうのゝ　実「さそうでどぎ
ります日ばゝ〳〵お義理深の且那と門家さるのの

おそうりうきまもまやうの涙を拾ふことろ
とびくごぎりまやう。ふやとろつしやうこ時や
私ぶ家人よ立またゝ〳〵ゝてあんごるきるとハ
どぎりません。「そのいやまぶ見こしも「屋ところ
えづゝのよ。そんゝあまへ何よゝろ見こしつ
所ようちくおるいよハきまのうら。ハ実義
実「きそうでどぎりまして。コレ順礼どのとちの大旦那
お門義さるもおるの時ハいろゝさみごとゝ湯を

るをとつとおかんづくしハ何よりもるい程よ私と云
ふよりおくりるきこの「ヨとこーぶ連合ハ此沢でふ
用ゝすぐあつく京大阪うら大和の方へいつくまぶ。
きるよハかくる夏でハるいうゝ下愛ぶぐ岡の前
ぶあつく居る由ゑとへおぶ前をぶ世つくおくを
賜へうゝかまくゝず心づくくおぶ「ハイ」ゆうら
何まで。花ハ紅よつくさまにませぬ。ヨ子ぢちゝぢの
ヨとこーをそのよるまでやつくぐさります。

いつハぶこゝと因縁でどぎりまするから「ア伊
そのよるを淳すハるいよ前まぐヨとこーぶおまくの
世話よたくとるこをすぐありでまるぐろるうゝ。
そんるふ氣のどくぐりみさるるハるいるる。世話
よるうこりるゝまこりまるぶ浮世といるのぐ。
だいぶ夜ぶあけこよるふまぐ早く寝るさいヨとこー
も寝る実務もおゆすまをみる。今日ハそのげぐ
ぶりゝこー。夜長ひきゝうぐて外を順ハ産委

さ〻き[illegible]ものゝ[illegible]ものとゝ「ゴウ〳〵」松風の音「さ〻〳〵」として何るすきくとする物うきふ実や後路のゝらひぞう〳〵。

寢覺繰言卷之五終